



## 「今度の牛はほんまに賢いぞ」

三豊市や観音寺市でロケが行われた映画「黒の牛」の先行上映が1月18日に三豊市諺間町のマリンウェーブで開かれた。徳島県西部から香川県の農家へ農耕用の牛が貸し出されていた慣習「借り耕牛」を題材にしている。主演は、台湾を拠点に世界的に活躍する俳優李康生さん。徳島県三好市出身の映画監督鳶哲一朗さんが脚本を執筆し、メガホンを取った。明治期の徳島県西部を舞台に、1人の男が牛と共に生活して田畠を耕しながら自然とのつながりを取り戻していく物語である。

午後2時からの部を妻と2人で見に行った。1人の男と1頭の黒牛が主人公、会話が殆ど無い。こんな映画は初めてだった。それだけに逆に訴えて来る迫力があった。男が牛に水を飲ませたり草を与えてたりするシーンに、自分の小学生時の牛との毎日の生活を思い出していた。牛鍬で田起こしするシーンや代掻き（田植えの準備に田へ水を入れて掻き混ぜる）のシーンに、あんなに速く進めば、牛もだが人間もすぐにへたぱり込んでしまうぞと、心配したりしながら見入っていた。ただひとつ違和感があったのは、飼い縄が左側だったことだ。これは右側でないのかなあ。左側は見たことがない。

家へ帰って一休みしていると、映画の場面が浮かんできてほっこりした気持ちになった。小学生の時に牛の世話をしたこと、取り分け夏休みの牛と過ごした日々を思い出していた。

父は、私が国民学校（昭和21年度まで、翌年から小学校と改称）1年生の1学期の終業式の日に戦争から生きて帰って来た。赤痢が流行していた。間無しに妹が赤痢になって入院した。私は、常磐村（現観音寺市）植田の母の実家へ夏休みが終わるまで預けられた。だから1年生の夏休みは牛の世話はしていない。

父は、「この牛は年を取ってしもうて、これ以上仕事をさせるのは可哀相じゃ」と言って、新しい若い牛が我が家にやって来た。麦刈後の田起こし（「地を使う」と言った）や田植え前の代掻きに、父と母が2人がかりで、「チャイ」（進め）、「ホセ」（左へ）、



「ヒコイ」(右へ)、「ボウ」(止まれ)、と言って、毎日、毎日教えたが、一向に覚えなかつたらしい。「今度の牛は、すっとの阿呆かも知れん」と父は毎晩言い続けていた。田植えが終わって一息入れていた夏休み前に、再び新しい若い牛が我が家へやって来た。

夏休みになると、毎朝早起きして、父に連れられて、朝飯前の一仕事、奥の山へ牛を連れて草刈りに行った。私は未だ草刈りは十分には出来ない。牛が草を食べている飼い縄を持って番をするのが仕事だった。父は刈った草を束ねて 杠 (天秤棒) で担いで帰った。私は父の前を飼い縄を持って牛を連れて帰った。父から毎朝出発する前に繰り返して言われたことがある。「飼い縄は手首に巻き付けたらいかんぞ。牛が万が一走ったら放すんぞ」懐かしい父の言葉を今に思い出す。

山から帰って来たら、父はバケツに水を汲んで来て牛に飲ませた。その後、はごを与えた。「はご」とは牛のご飯のこと、藁を小さく切って、飼い葉桶 (大きな木の桶) に入れ、水を少しかけて、その上へ米糠をかけてやる。その後で 徐 に人間の朝ご飯が始まるのだった。



朝ご飯が終わると、父の最初の仕事は牛を広庭へ連れ出して、全身を金のたわしで搔いてやることだった。毎朝、私はそれを横で見ていた。最後に耳の後や頸の下を搔いて終わった。時々、頸の下にダニが食い付いていた。手で取って足で踏みつぶすと血が出た。夏休みも半ば過ぎた頃、父が「明日から、この仕事は健一、お前の仕事じゃ。毎朝見とったきに出来るじゃろが。牛の真後ろだけは絶対に行くなよ。万が一、蹴られたらいかんきにのう」と念を押された。それからは、朝と同じように、父に言われて夕方も牛と話しながら搔いてやった。楽しかった。

稻刈りが終わって、秋の田起こしが始まった。父と母が2人がかりで教えた。晩ご飯時に父が、にこにこしながら言った。「今度は、ええ牛に当たったようじゃ」「そら良かった。牛が一番じゃきにのう」と祖父が相槌を打った。母はこれで安心じゃと、にこにこ顔で聞いていた。私は牛の話を聞くと、嬉しく楽しかった。

農繁期は、学校が終わったら出来るだけ早く家へ帰った。夕方、仕事が終わった牛を、田圃から連れて帰って、水を飲ませて「はご」をやるのは私の仕事だった。「牛が牛舎へ入ったら、すぐにかんぬき（入口の棒）を入れるんぞ」帰り際の父の注意だった。父と母と祖父は田圃で仕事の続きをして暗くなないと帰って来なかつた。「今度の牛はほんまに賢い。こなに賢い牛は初めてじゃ」、牛と仕事をした日は、父は決まってこの言葉を繰り返した。

この言葉が、正しく理解出来たのは、数年後のことである。中学生になって牛と田起こしの稽古をして、どのように賢いかがやっと分かったのだった。麦刈りの後の取り入れが終わった日曜日の朝ご飯時に、「中学生になったことだし、「むんがらだおし」

（麦刈後の畠を崩す田起こし）で、牛を使う稽古をしてみるか」と父に言われ、家のすぐ前の百田池で初めて牛を使って田起こしをした。1畠を2往復して崩していくのである。この時のことは本当によく憶えている。「往」から「復」へ方向転換する時、私がきちんと「牛鍬」を移動して構えているかどうかを、私の方へ振り返って確認しているのだ。「お前が小学校の時からよく世話してやったのを、この牛はちゃんと分かっとんじゃのう。ほんまに賢い牛じゃ」父は、私ではなく牛をべた褒めしたのだった。

それでも、小学生だった私が「ほんまに賢い」と思ったことがあった。牛の体を暫く搔いてやっていると手がだるくなってくる。搔くのを止めると、私の方を振り向く。知らん顔をしていると、体を寄せてくる。それでも相手にしないと、私の足を片方の前足で軽く踏んでくる。「おお、分かった、分かった」と言って、また暫く搔いてやった。「この牛は、強く踏んだらわしの足がつぶれるのを知っとるんかいのう」と思ったことが何度かあった。4年、5年になつて、「もう十分に搔いてやつたぞ」と話し掛けながら、最後に頸の下を搔いてやつて「これでおしまい」と顔を撫でてやると、もっと搔いてくれと寄つてくることはしなくなつたのだった。

昭和37（1962）年、観音寺商業高校（現観音寺総合高校）へ奉職した。父が



「賢い牛も年を取ったことだし、お前が帰って來たので、耕耘機こううんきを買うとするか」と言つて、スズエの耕耘機を買った。隣近所では最初だった。「これこれの田圃は、ワシが牛で使う（田起こし）きに、後はお前が耕耘機でやってくれ」と父に言われた。もう牛に無理はさせられない。でも、少しは仕事もさせてやらないかんと考えたのだろう。『親は牛で、息子は耕耘機か』近所の人はさぞ可笑おかしかったに違いない。

スズエの耕耘機は馬力が弱かったので、昭和43（1968）年にヤンマー・ディーゼルに買い替えた。その耕耘機は今も我が家で活躍している。

賢かった我が家の牛は昭和47（1972）年、我が家からいなくなつた。勤めの学校から帰つて牛舎を覗いて、「ああ、賢い牛ちゃんはいないんだ」と自分に言い聞かせねばならない日が暫く続いた。

教師生活最後の4年間、農業経営高校でお世話になつた。日々の勤務の中で農場を見て回るのが、心やすまる楽しみの時間だった。取り分け黒牛に会えるのが楽しみだった。ある日、教頭さんが「ご一緒にしてもよろしいですか」と、2人で一緒に見て回ったことがあった。肥育牛ひいくぎゅうが10頭いる牛舎へ行った。私が牛舎の中央辺りで立ち止まって牛の方へ向くと、いつものように牛が集まって來た。最初に寄つて來た数頭の牛の頸の下を撫でてやると、牛は私の手を舐めてくれた。私の後にいた教頭さんが私の横へ来て手を差し出したら、牛は一斉に後退あとずさりした。教頭さんが、「校長さんは牛に好かれ、私はどうして嫌われるんでしょうか」と言つたので、「私は小学校の時から昭和47年まで、家でずっと牛の世話をしていたからじゃないかな」と答えたのだった。ちなみに教頭さんは高松市栗林町の生れで、現在もそちらで元氣でいられる。

（令和8年2月1日）